

『鏡 (09/20)』

鏡にある像こそ
おまえなのだ
その身体が
その顔が
それが真実なのだ

それともなにか
おまえのそれは
聳えるエベレストの山だと
ぬかすのか

今日も十四歳の一人が
虐めに死んでいった世の中
震え痛む心が
時間とともに溶けていく

世の中が鏡に映っている
夜の店のガラス窓に
昼のビルのガラス窓に
世の中の人々が映っている

見たことありますか
その姿を
そこに映っている人々の
顔を身体を

鏡にある像こそ
おまえなのだ
その身体は
その顔は
それが真実なのだ

『雲 (09/24)』

秋の雲は遠く
透き通った青空へ
筋を描き
心と呼んでいるようです

秋の空は高く
透き通った青空へ
翾を描き
心を引き込んでいるようです

野畑の遠く野火の煙が
立ち昇り
街の夕暮れの裏路地には
秋刀魚の煙が
漂い流れ
裸電球が灯った
遠い遠い帰らない
日々が人々の心に響いている

秋の空は遠く
透き通った青空へ
翾を描き
心を引き込んでいるようです

秋の雲は高く
透き通った青空へ
筋を描き
私と呼んでいるようです

『通り (09/29)』

空き地に蝙蝠が
飛び交い

街の夕暮れに
店々の明かりが
輝き出す

パーマ屋さんがベカリリーが
喫茶店が魚屋さんが
洋装店が豆腐屋さんが
肉やさんが小物店屋が
八百屋さんが本屋さんが

通りに並ぶ店々を
人が通る人々を通る
もう秋なのですね
空き地の草叢で虫の音が
響いているのです

手をつないだ若いカップル
手提げを持ったおばあさん
歩く人も自転車の人も
通りを走っていく車も
人は生きていますね

希望を秘めたり夢を求めたり
あるいは
今まで歩いてきた道程の
情景を描いてみたり
人は生きていますね

夕暮れの空き地に
蝙蝠が飛び交い
店々の明かりが輝き
望月の下で
私も生きています

『月と虫 (09/29)』

中秋の月の鏡の
如く明かり有り
空の冴えたる遠く彼方
幾夜を見せしや
名月や
幾夜を照らせしや
名月や
物言わず照らせしや

空き地なる茂草に鳴く
虫の音の響きは
この世の無情の音か
小さき命の
闇へ響き消えし虫の
鳴き声よ
人の命の
この世に消えし叫びよ

End all 1996/09

『空 (10/20)』

そらは青く高く聳え
街路樹は黄色に染まり
道行く人は
めっきりとコート姿が
多くなる

晩秋なのですね
陽は部屋の奥まで
遠慮なく射し込んできて
日陰に入ると
急に寒さを感じるのです
壁にかけて有る上着
読み捨てたままの新聞
自分の人生のように
じっと時のめぐりを
待っている

いつもの駅舎が
裸電球を灯して佇んでいる
最終電車が行った後
人が二三人改札口を出て
駅員がようやく寝仕度をしている

『愚者 (10/29)』

愚かなる者は
愚かなるまま人生を
終えよと言うのか
彼が生きて燃やした
希望も夢も……それら
生きの悩みを
愚かなる物と言って
片付けてしまうのか

ならば言うわしてもらおう
皆が同じ地点に立てと
走る才能会話の才能生計の才能
差別をつけずに同じにしると
富者の家に生まれ
貧者の家に生まれ
みな同じにしてくれと
産まれ出る平等を保障してくれと

天才は天才のまま
人生を終える
彼が死まで描いた
希望も夢も……それらを

凡人には解らぬ物と賛され
記録に名をとどめる

『灯火 (10/30)』

冬支度の夕暮れは
寂しい色に染められて
旅人は途方にくれる

暖炉もなく
家族の温もりもなく
寒さの中で
一人道化を演じます
冷たい道を
歩くしかなさそうです
だから
夕暮れに染まる灯火に
ありし日を浮かべるのです

夕暮れ迫る明かりは
足元を照らし
旅人の足どりは寂しい

『闇と無 (10/31)』

本当のことを言えよ
人生の闇よ
じっと見つめていないで
お前の人生はこうだと
言ってみろよ
お前の死はこうだと
言ってみろよ
ただじっと夜の中から
佇んで見ていないで
私の人生を言ってみろよ

深閑の闇にほんのりと
灯っている明かりに
私は真実を見た
ああこれが人生だと
暗やみの海の中で
わずか一メートル四方の
照明の明るさが
それこそ人生なのだ
私はそう感じながら
深閑の灯火を睨んでいた

人は生き人は死ぬ
嫌だと言っても
人は死を持って閉じる
すぐに彼の生きて
有ったことすらも
消え去って無になって行く
人がそうであるように
人類も何時かこの宇宙から
消えて行くのであろう
人間が生きて有ったことすら
すべて消し去られるのであろう
何時かいつの日か
宇宙の根源へ辿り着きたい

End all 1996/11